

自己研鑽としての教師の学び

—その歴史的変遷—

助川 晃 洋

I 執筆意図

明治末期、例えば1909年前後に福井県師範学校が「教授法研究」、すなわち「実地授業」と「他人の批評」、「自己批評」に基づく実践の漸進的改造に着手して以来⁽¹⁾、我が国では、授業研究の営みを通じて、教師の力量形成が図られてきた。それはいまやレッスンスタディ (lesson study) と呼ばれて、アメリカやカナダからインドネシアなどのアジア諸国、さらにはヨーロッパ各国に至るまで、世界的に普及している⁽²⁾。しかし「教師の教育研究」⁽³⁾が、上記に限らず、これまで様々な形で展開されてきた事実も忘れてはならない。以下では、その変化の過程をかなり大づかみにたどる。

II 読書と哲学への傾倒

大正新教育を具体的に推進した現場教師の間では、当時流行していた内外の哲学書を読み、それを教育と結びつけて思考する動きが見られた。1921年8月1日から8日まで、小石川区大塚窪町の東京高等師範学校講堂で開催された講演会の記録である『八大教育主張』所収の「全人教育論」において、成城小学校主事の小原国芳は、明石女子師範学校附属小学校主事で、『分団式動的教育法』（1912年）と『分団式動的教育法』（1915年）を主著に持ち（ともに弘学館書店刊）、「動的教育論」を唱えて、教育方法を重視する及川平治からの哲学・思想の重要性を説く自分に対する批判を受けて、次のように反論している⁽⁴⁾。

読書会をやつてはカントの「純粹理性批判」や田邊元さんの「科学概論」あたり分からぬなり御互でカジツて行くのは

その為であります。殊にあなたの主張される動的の動の説明はどこから来るのでせうか。ヘラクライトスやヘーゲル、ベルグソンや西田先生に関係ないのでせうか。教授法そのものは認識論と非常に密接な関係のあるものと思ひますが独逸のカント流のあの精細な七面倒な論理主義も、ベルグソンや印度の神秘哲学なども大事ものを教へて呉れることゝ思ひます。すぐに。西田先生の「直観と反省」や「意識の問題」などはぜひ教授法論者が読まねばならぬ大事な本と思ひますが、やはりそれでも心理学や生物学丈けでよいのでせうか。

このしばらく後で、小原は聴衆の教師たちに向けて「西田先生の『善の研究』も味つて欲しい」⁽⁵⁾と情熱を込めて語っている。また1924年春、埼玉県師範学校を卒えて、熊谷女子尋常高等小学校に新任した高橋正吉には、次のようなエピソードが残されている⁽⁶⁾。

当時高橋の月給は四十八円であつたが、そのうち毎月平均十円位本代に充て、毎日四時間読書したという。彼が購入し読破した本には、西田幾多郎の「自覚における直観と反省」、リッケルトの「認識の対象」、吉田台治の「懷疑思惟の研究」にあらわれたる知識の本質、村岡省五郎の「知識の本質」等があつた。吉田は「生活に心配がなかつたから、彼は俸給ぐらい読んだ」という。

そして京都帝国大学卒業後、故郷の信州に戻り、上諏訪の高島実業補習学校の教師となつた唐木順三は、1930年2月の信濃毎日新聞（9～13日の連載記事）に、次のような文章を寄せている⁽⁷⁾。

信州の思想界はかつては進歩的であつた教育者（主として小学校の）によつて代表せられたと見て大過ないであらう。オイケン、ベルグソン、古くは自然主義、白樺派が、日本の学界、思想界に輸入され、或は勃興すると殆ど同時に信州思想界に反映し、問題を与へたことは、信州教育史をひもとくものの等しく認めるところであらう。

これはかつて、北信の小学校長である松本深氏によつて、

新聞紙上に語られたことを、私は興味深く読んだことを記憶する。松本氏はかう語られてゐた。当時（多分大正三、四年頃であらう）の若い教員は放課と同時に「創造的進化とは」と腕を組んで沈思し、黙想したものである。

Ⅲ 外部とのコミットメント

昭和戦前・戦中期には、一切の教育運動（プロレタリア・新興教育、生活綴方、教育科学など）が国家当局による弾圧を受け、抑えられたのであるが⁽⁸⁾、戦後を迎え、日本教職員組合の本格的な活動が始まった1951年を境に、全国的な民間教育研究団体の結成が相次ぎ⁽⁹⁾、大会（やセミナー）が定期的開催されるようになる。1967年8月の論稿において、東京大学教育学部教授の勝田守一は、1952年に再建された教育科学研究会の「研究集会」の意味をとらえ直している。そこで勝田は、広がりつつあった「事例の多数主義」、「統計処理」中心の研究を批判した上で、次のように述べている。

共同研究で持ち寄られる経験や実践は、教師ひとりひとりの人格がその心の操作を通してそれぞれ典型化の萌芽をうちに秘めた貴重なものだ。もちろん、それに固執して、これに含まれている主観的要素や無意識な偏向や誇張をそのまま主張していいというわけではない。それをそのまま一般化すると経験主義に陥る。むしろそれらを理論の光に当てながらぶつけ合い、事実と経験のほんとうの意味を精神に照し出す典型にまでゆっくりとつくりあげていくのが共同研究の深い意義だ。

勝田は、実践と経験の探究の場として集会を位置づけ、教科研の「大会にこのような研究の方法意識と連帯の精神が貫徹していくことを期待」していた⁽¹⁰⁾。

また1950年代以降、各地で教師の自主的なサークルや研究会（勉強会）が無数に誕生している⁽¹¹⁾。向山洋一の『教師修業十年』では、（断定はできないが、おそらく）1960年代の終わりに東京都大田区で結成された京浜教育サークルの様子が、次のように描

かれている。

サークルの出席者が持ちよったレポートを重ねると、ファイル一冊分になった。内容は、人それぞれにちがっていた。全国放送教育研究会への提案、学芸会用の自作の脚本、保護者会用の冊子、ひと塾参加の報告、遊びの実態調査と分析、教育技術論の覚え書き、全員の学級通信。これらが、前回から今回までの半月位の間各自の主な仕事であった。

いつも七、八名ぐらいの小さな研究会である。しかし、一人ひとりの実践の検討をすると、三時間位の時間はまたたく間にすぎてしまうのであった。語り尽くせぬ話を、二次会の居酒屋でしゃべるのを常としていた。研究会の中では、レポートのある報告のみを検討することにしてきたから、あれこれの話はいつも二次会で語られていた。

「教師はみな、自分の研究の場を持った方が良いと思う。学校の中であれ、学校外であれ、大きな研究団体であれ、ぼくたちみたいにささやかなのであれ、それは自分の教育を検証し、前進させ、時には支えてくれるものとなるからである」と向山は言う⁽¹²⁾。

IV 大学院における研究者との交流

1978年の参議院文教委員会において、教員養成系学部を置くすべての大学で、同学部を基礎とする大学院（修士課程）を整備・充実することが附帯決議されている（1996年度、全48大学に教育学研究科を設置完了）⁽¹³⁾。しかしそれ以前に、宮城教育大学では教員養成系大学院、より正確には、「教員のための大学院」である「現職教育研究科」の開設に向けた準備が進められていた⁽¹⁴⁾。1973年10月、このとき学長を務めていた林竹二は、国立大学協会教員養成制度特別委員会に提出した意見書の中で、「附属学校における教育実践（授業）に即した研究」を軸に据えて、経験を積んだ現職教員院生と大学教員が協働し、「臨床的な教育の学問を創出する」ことを大学院の第一の使命に掲げている⁽¹⁵⁾。1974年7月の教授会資料の「はじめに」の冒頭では、林自らい

きなり次のように記している⁽¹⁶⁾。

我々は、学部段階の教育をおわったものにたいして、漠然と、より高い教育を与えるための機関としてなら、本学に大学院をおく意味はないと考えている。我々が、いまつくろうとしている大学院は、直接的・具体的には、教員特に小学校教員のための高次の実践的・学問的訓練の場であるが、長期的には教育にかかわる臨床の学をつくり、教員養成教育の実質をつくり出すための仕事場である。大学院学生は、この仕事への参加を通じて、もっともよく、より高き教育実践にたいして準備されるであろう。

そして21世紀に入ると、教師教育の高度化と専門職化を実現するための方策が各所で活発に議論されるようになる。2001年11月22日に出された国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会（在り方懇）の報告は、「専門大学院」の導入を検討する必要性を訴えている⁽¹⁷⁾。2006年7月11日の中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」では、『「教職大学院」制度の創設」が提言され⁽¹⁸⁾、2008年度から正式に発足している。そこでは、研究者教員と実務家教員がチームを組み、一定の教職経験を有する現職教員を対象に、スクールリーダー（中核的中堅教員）を養成することをめざして、理論と実践の架橋・往還・融合を強く意識し、ケーススタディを重視した指導が行われている⁽¹⁹⁾。2012年8月28日の中教審「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上について（答申）」では、「一部の教職大学院」という断りの上で、次の通り、福井大学の先進的な取り組みが紹介・評価されている（ストレートマスターへの言及を含む）。

学校を大学院の実習・学修の拠点とする方式により、校内研修と大学院での学びを高度に組み合わせて現場での課題の解決に当たる試みを行い、成果を上げている。これは、拠点となる連携協力校での具体的課題の解決を題材として、当該校の現職教員が勤務を継続しながら、大学院での学びを行うことを基本としている。加えて、大学教員が連携協力校を定

期的に訪問し、連携協力校における学校全体、更には近隣の学校の教員も含めて、研修を一体的に行いながら、併せて学部新卒学生も連携協力校において学校での授業研究や指導の改善のメカニズムを学ぶという方式が採られており、こうした取組も十分に参考とすべきである⁽²⁰⁾。

V 今後の課題

そもそも教師には、常に学び続ける存在であることが期待されている。2021年1月26日の中教審「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」では、次のように述べられている⁽²¹⁾。

教師が、時代の変化に対応して求められる資質・能力を身に付けるためには、個々の教師が養成段階に身に付けた知識・技能だけで教職生涯を過ごすのではなく、求められる知識・技能が変わっていくことを意識して、継続的に新しい知識・技能を学び続けていくことが必要である。

しかし同年11月15日の中教審「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会「『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて（審議まとめ）」は、教員免許更新制の見直しを打ち出しただけで、これからの具体的な方向性については何ら明言していない⁽²²⁾。教師にとってせつかくの学習機会が、行政・企業ベースのパッケージ化され、圧縮されたオンライン講習ばかりでよいのかどうか。短期・即効が好まれる時代であって、それとは異なる迂遠で長期的な努力をどのように促すか。学校の枠を超えた教師間のネットワークをどのように構築するか。専門職学習コミュニティ（professional learning communities）としての学校をどのように支援するか⁽²³⁾。本稿を足掛かりに、引き続き考察を重ねることで、これらの問いに対する回答を提示したい。

注

- (1) 上田三平「教授法研究の過程」『教育之実際』第4巻第1号、教育実務社／宝文館、1909年11月、pp.10-13.
- (2) 小野由美子「国際教育協力における日本型教育実践移転の成果と課題－授業研究を事例に－」『教育学研究』第86巻第4号、日本教育学会、2019年12月、pp.537-549.
興津妙子・川口純編著『教員政策と国際協力 未来を拓く教育を全ての子どもに』明石書店、2018年
千々布敏弥『プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティによる学校再生 日本にいる「青い鳥」』教育出版、2014年
- (3) 稲垣忠彦編『日本の教師20 教師の教育研究』ぎょうせい、1993年
- (4) 小原国芳「全人教育論」尼子止編、樋口長市・河野清丸・手塚岸衛・千葉命吉・稲毛金七・及川平治・小原国芳・片上伸合著『八大教育主張』大日本学術協会、1921年、p.30.
- (5) 同上、p.36.
- (6) 窪田祥宏「大正期における新教育運動の展開－埼玉県の場合を中心として－」『教育学雑誌』第7号、日本大学教育学会、1973年3月、p.43.
引用文中に登場する「吉田」とは、同僚の吉田芳雄のことである。「吉田は篠原助市、長田新、小西重直、波多野精一らの学者をたずね、直接指導を仰いだ。その訪問を通じて長田、小西の両先生ととくに親交を深めた彼は、両先生の紹介を得て京都哲学会に入会し、月に一回位は遠く京都まで出向き、西田幾多郎らの指導をうけた」（同上）。
- (7) 唐木順三「信州思想界を想ふ－中村孝三氏の所論を機として－」『唐木順三全集』第19巻、筑摩書房、1977年、p.64.
- (8) 柿沼肇『新興教育運動の研究 1930年代のプロレタリア教育運動』ミネルヴァ書房、1981年
滑川道夫『日本作文綴方教育史3 昭和篇I』国土社、

1983年

山田清人『教育科学運動史－1931年から1944年まで－』
国土社、1968年

- (9) 山住正己「民間教育研究運動」『世界大百科事典27（改訂版）』平凡社、2005年、p.558.
- (10) 勝田守一「研究集会というもの－大会を迎える用意について」『教育』No.211、国土社、1967年8月、p.9.
- (11) 大槻健『戦後民間教育運動史』あゆみ出版、1982年
- (12) 向山洋一『教師修業十年 プロ教師への道』明治図書出版、1986年、pp.154-156.
- (13) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337061.htm（2022年7月31日アクセス）
- (14) 林竹二「〔資料〕宮城教育大学大学院（修士課程）」『学ぶということ』国土社、1978年、pp.212-215.
- (15) 林竹二「『教員養成大学における大学院の問題』にたいする意見」『学ぶということ』国土社、1978年、pp.202-203.
- (16) (14) と同じ、p.212.
- (17) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/005/toushin/011108.htm（2022年8月1日アクセス）
- (18) 『教育委員会月報』第58巻第7号（通巻第685号）、第一法規、2006年10月、pp.27-40.
- (19) 助川晃洋「学力保障をめざすカリキュラム設計の理論としての『逆向き設計』論とそれに基づく中学校教育実践事例の検討－北原琢也編著『「特色ある学校づくり」とカリキュラム・マネジメント』を読む－」『宮崎大学教育文化学部紀要（教育科学）』第22号、宮崎大学教育文化学部、2010年3月、p.15.
- (20) 『大学資料』第198号、文教協会、2013年2月、p.7.
- (21) https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf（2022年8月3日アクセス）

- (22) https://www.mext.go.jp/content/20211124-mxt_kyoiku_jinzai02-000019122_1.pdf (2022年8月3日アクセス)
- (23) エティエンヌ・ウエンガー、リチャード・マクダーモット、ウィリアム・M・スナイダー著、野村恭彦監修、野中郁次郎解説、櫻井祐子訳『コミュニティ・オブ・プラクティス ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』翔泳社、2002年
ピーター・M・センゲ著、枝廣淳子・小田理一郎・中小路佳代子訳『学習する組織システム思考で未来を創造する』英治出版、2011年

参考文献

- 浅田匡・生田孝至・藤岡完治編著『成長する教師 教師学への誘い』金子書房、1998年
- 稲垣忠彦・寺崎昌男・松平信久編『教師のライフコース 昭和史を教師として生きて』東京大学出版会、1988年
- 宇野田尚哉・川口隆行・坂口博・鳥羽耕史・中谷いずみ・道場親信編『「サークルの時代」を読む 戦後文化運動研究への招待』影書房、2016年
- 遠藤孝夫「林竹二の学問観と宮教大の教員養成教育改革」『弘前大学教育学部紀要』第95号、弘前大学教育学部、2006年3月、pp.113-124.
- 遠藤孝夫・福島裕敏編著『教員養成学の誕生 弘前大学教育学部の挑戦』東信堂、2007年
- 大泉浩一『教育の冒険 林竹二と宮城教育大学の1970年代』本の森、2003年
- 勝田守一『国民教育の課題』国土社、1966年
- 金井徹「務台理作の信濃教育会における役割の検討—信濃哲学会を中心とした京都学派との関係に着目して—」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第61集第2号、東北大学大学院教育学研究科、2013年6月、pp.23-38.
- 佐久間亜紀「六年制教員養成の可能性と問題点」『季刊教育法』第163号、エイデル研究所、2009年12月、pp.21-27.

- 佐藤学『教師というアポリア 反省的实践へ』世織書房、1998年
- ドナルド・A・ショーン著、柳沢昌一・三輪建二監訳『省察的实践とは何か プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房、2007年
- ドナルド・A・ショーン著、柳沢昌一・村田晶子監訳『省察的实践者の教育 プロフェッショナル・スクールの実践と理論』鳳書房、2017年
- 鈴木悠太『教師の「専門家共同体」の形成と展開 アメリカ学校改革研究の系譜』勁草書房、2018年
- 土屋基規『戦後日本教員養成の歴史的研究』風間書房、2017年
- 中村敏弘『教育実践検討サークル 創造する東北の教師たち』国土社、1975年
- 二谷貞夫・和井田清司・釜田聡編『「上越教師の会」の研究』学文社、2007年
- 橋本美保「八大教育主張講演会の教育史的意義」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』第66集第1号、東京学芸大学、2015年2月、pp.55-66.
- 船寄俊雄『近代日本中等教員養成論争史論 「大学における教員養成」原則の歴史的研究』学文社、1998年
- 松木健一「教員養成改革とカリキュラム 『在り方懇』以降の教育改革をカリキュラム改善の視点から見直す」『教師教育研究』Vol.7、福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻、2014年6月、pp.157-162.
- 水原克敏『近代日本教員養成史研究－教育者精神主義の確立過程－』風間書房、1990年
- 宮山昌治「大正期におけるベルクソン哲学の受容」『人文』4号、学習院大学人文科学研究所、2006年3月、pp.83-104.
- 向山洋一編著『教師の才能を伸ばす－京浜教育サークルの秘密』明治図書出版、1986年
- 森透「福井大学における教育実践研究と教師教育改革－1980年代以降の改革史と教職大学院の創設－」『教育学研究』第

80巻第4号、日本教育学会、2013年12月、pp.466-477.
柳沢昌一「教育改革と省察的実践のコミュニティへの企図」
『教育学研究』第88巻第1号、日本教育学会、2021年3月、
pp.65-75.
横須賀薫『教師養成教育の探究』評論社、1976年